

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|------|---|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 甲 | 第 | 号 |
|------|---|---|---|---|

氏 名 塚本 峰子

論 文 題 目


Tooth brushing, tooth loss, and risk of upper aerodigestive tract (UADT) cancer: a cohort study of Japanese dentists

(歯磨き、歯の喪失と上部気道消化管がんリスク：日本人歯科医師のコホート研究)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

松尾 恵太郎 

名古屋大学教授

委員

濱嶋 信之 

名古屋大学教授

委員

日比 英晴 

名古屋大学教授

指導教授

若井 建志 

論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

今回、全国都道府県歯科医師会会員を対象者としたコホート研究（歯科医師を対象とした歯と全身の健康、栄養との関連に関する研究：LEMONADE Study）のデータを用いて、Cox 比例ハザードモデルにより歯磨き頻度と上部気道消化管がん発生との関連を検討した。同時に歯の喪失と上部気道消化管がんリスクとの関連も解析した。その結果、1日歯磨き回数1回以下で有意に高い上部気道消化管がんハザード比が認められ、1日2回以上は歯を磨かない者が、より頻回かつ効果的に歯を磨けば、上部気道消化管がんリスクが減少する可能性が示唆された。一方、歯の喪失と上部気道消化管がんリスクとの間には有意な関連は認められなかった。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 歯の喪失と上部気道消化管がんリスクとの間には有意な関連は認められなかったものの、本研究における上部気道消化管がんの症例数は、多くの歯を失った研究参加者の中では少なかったため、歯の喪失が上部気道消化管がんのリスクの指標となり得るかどうかを判断するためには、さらに研究が必要であると考えられる。また、歯の喪失は、セルフケアの態度、外傷、矯正治療、健康保険の状況、歯科医療へのアクセス、受けた歯科医療の質など、さまざまな要因と関連している可能性がある。本研究の参加者は全員歯科医師であり、一般よりも口腔ケアに関する知識と技術を持っているため、本研究の所見は一般集団とは異なるかもしれない。
2. 喫煙経験がない集団では1日歯磨き回数1回以下で有意に上部気道消化管がんリスクが上昇するが、喫煙経験がある集団では1日歯磨き回数と上部気道消化管がんリスクの間には有意な関連は認められなかった。ただし歯磨き回数と喫煙との間に負の相互作用があるか否かについては、本研究の上部気道消化管がん症例数では判断困難であった。
3. 本研究における口腔がんの症例数は11例と少なく、1日歯磨き回数と口腔がんリスクとの関連を解析可能な数ではなかった。先行研究では、13の症例対照研究の報告があるが、7研究が有意な関連を示し、6研究は有意な関連を示しておらず、所見は一致していない。そのため、1日歯磨き回数が口腔がんリスクの指標となり得るかどうかを判断するためには、さらに研究が必要であると考えられる。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

| | | | | |
|--|-----------------|--------|-----------------|---------|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 | 氏 名 | 塚 本 峰 子 |
| 試験担当者 | 主査 | 松尾 恵太郎 | 副査 ₁ | 濱嶋 信之 |
| | 副査 ₂ | 日比 英晴 | 指導教授 | 若 井 建 志 |
| (試験の結果の要旨) | | | | |
| <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 喪失歯数と上部気道消化管がんリスクとの関連の結果の評価について 2. 上部気道消化管がんリスクと喫煙に対する歯磨き回数と喫煙との間の相互作用について 3. 1日の歯磨き回数と口腔がんリスクとの関連について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、予防医学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p> | | | | |